

大学を資源とした地域との関わりについて

高齢者プロジェクトの実践報告

The relationship between community and academic resources

高橋伸子・石川真理子・坂口佳江・宮田正子・孫琴・渡里寿伸・吉村昌子

TAKAHASHI Nobuko・ISHIKAWA Mariko・SAKAGUCHI Yoshie・MIYATA Masako

SUN Qin・WATARI Toshinobu・YOSHIMURA Masako

立命館大学

(Ritsumeikan University)

Key words: 地域, 大学資源, 連携

はじめに

立命館大学・人間科学研究所・高齢者プロジェクトでは、2006年から立命館大学衣笠キャンパスの創思館において、継続的な「音読・計算」活動の実践を行ってきた。このプロジェクトでは、高齢者の認知機能や日常生活上の活動に、「音読・計算」活動がどのような効果をもたらすのかを検討している。2006年から始まった大学での活動は4年目を迎えた。大学を研究拠点に、行政や保健所、地域住民、社会福祉協議会、民生児童委員協議会をはじめとする地域の各種団体と連携をとりながら、地域へ拡がりを見せている。展開の経緯について報告する。

方法

簡単な計算と文章の音読を中心とする教材を用いた学習を、高齢者(学習者)と学習援助者(サポーター)がコミュニケーションをとりながら行う。高齢者の認知機能やコミュニケーション能力、身辺自立機能などの改善をめざすものである。具体的には、決められた各会場に集まり、研修を受けた学習援助者(サポーター)が課題を高齢者(学習者)に提供し、課題を行い、即時フィードバックをする。1回につき20分から30分実施する。活動場所は、老人施設(市原寮):2002年~現在に至る。大学(立命館大学):2006年~現在に至る。京都北区の2小学校区(衣笠学区・大將軍学区):2007年~現在に至る。京都市北区の北山三学区(小野郷学区・中川学区・雲が畑学区):2009年度実施。開設予定として、京都市北区の2学区が上がっている。

1.活動を開始するまで

地域住民から援助者として活動するサポーターの募集と育成のための研修を実施。同時に学習希望者を市民しんぶん北区版等の媒体を使って、行政と共同体制で募集。学内では、インターンシップ生や学生・大学院生への説明会を開催した。

表1 学習者の推移

| | 2006年 | 2007年 | 2008年 | 2009年 |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| 立命館 | 55 | 79 | 84 | 85 |
| 市原寮 | 10 | 14 | 17 | 17 |
| 大將軍 | | 13 | 18 | 17 |
| 衣笠 | | 11 | 11 | 11 |

表2 サポーターの推移

| | 2006年 | 2007年 | 2008年 | 2009年 |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| サポーター | 32 | 52 | 65 | 70 |

2.立命館大学での活動

援助者は地域サポーター・インターンシップ生・ボランティア学生・大学院生、高齢者プロジェクト運営委員である。協力機関として北区役所。対象者は地域に住む健康高齢者であるが、病院ものわずれ外来からの紹介も数名ある。会場は創思館2階トレーニングルーム。活動日は月曜・水曜・金曜の週3日で、時間は10時・10時30分・11時の3交代制で各30分間。内容は「音読・計算」課題を各3枚から5枚程度実施する。

3.高齢者施設「市原寮」での活動

施設職員・京都産業大学の学生・地域サポーター・学生サポーター・高齢者プロジェクト運営委員が援助者。対象者は介護保険の自立から要介護4までの施設入所者である。会場は集会所。活動日は月曜と水曜。時間は15時から16時までの1時間。内容は同じ。自主学習日を週に1度設けている。

4.地域への展開 サテライト大將軍・衣笠での活動

北区役所・地域サポーター・社会福祉協議会などの地域各種団体・小学校・高齢者プロジェクト運営委員が援助者。会場は小学校のランチルーム・クラブハウスを借りている。毎年9月から翌3月までの週1回(衣笠:火曜・大將軍:木曜)、時間は10時から11時。内容は同じ。地域包括支援センターの担当者が月に1回程度相談に応じている。

考察

研究機関である大学と行政が連携し、地域住民が地域に住む高齢者を支える仕組みの構築と実践は、地域に受け入れられ、拡がりを見せている。援助者は10代のインターンシップ学生から70代の地域サポーターまで幅広い。学生は老年期の研究を行ったり、改善の提案を行う。「音読・計算」課題を介してのコミュニケーションは、援助者、高齢者の双方にとって優良な時間になっているようだ。大学は地域の一部であり、地域資源としての役割を担うことが期待されている。

引用文献

高橋伸子(2007)地域に暮らす高齢者を援助するサポートネットの組織化およびその発展, 立命館人間科学研究 14, 143-150.